パネルディスカッション７：在宅医療における病院地域連携室の役割
-起点あるいはハブとして-

演題名	総合診療サポートセンターにおける看護師の役割　－患者を看る・生活を見る－

概要

最先端医療の提供を目的とした大学病院の平均在院日数は２週間前後である。入院期間が短縮化される中で、「患者の生活を切らない、その人らしい生き方を実現する支援を目指す」をミッションに、2013 年４月、総合診療サポートセンター（TMSC）を開設した。従来の縦割り組織であった部門を発展・再統合し、「生活を軸足においた医療を提供する」という看護師のアイデンティティを重視した、医療福祉連携推進部門（地域連携、医療福祉・退院調整、紹介･逆紹介等）・患者総合サポート部門　（患者の総合相談ケア、入院基本情報収集とアセスメント、各種スクリーニング・ＩＣ支援等）連携事務部門　（医事・企画・情報関連、メディエーション・サービス関連等）の３部門で構成されている。事務職を含めた多職種が協働し、企画やサービス提供を行っている。

患者総合サポート部門に、専門・認定看護師や経験豊かな看護師を配置し、外来の入院決定時より患者に関わり、基本情報の収集はもとよりアセスメントを行い入院前に病棟に伝えている。特に必要と思われる内容は、病棟看護師長に直接報告している。翌朝の医療福祉連携推進部門の退院調整看護師とのミーティングでは情報を共有し、入院時から退院に向けた支援が速やかに開始されるように努めている。同時に、入院決定時に対応した認定看護師が、入院後病棟に出向き看護介入することもある。一方病棟側は、提供された情報を、患者の状態や生活状況に応じたベッドコントロール、受け持ち看護師の選定等に活用し、以前に比べ個々の患者への対応や関わりが深まり、急性期病棟の看護師が、早期から患者の生活に目を向けた支援の必要性を考え取り組み始めたと評価している。

急性期医療の場で働く看護師は、患者の回復に至る全過程を看ることがなく地域へバトンタッチするために、遣り甲斐や達成感が得られ難い。患者を一人の生活者として捉え、急性期の患者の健康レベルの向上と、地域における生活で、どのような支援が必要なのかを考えながら、日々の看護を実践して欲しいと願っている。TMSC は、患者・家族を中心にしたチーム医慮の再考の場であると位置づけている。大学病院の使命として、従来のシステムから脱却し、革新的に医療体制の創造に向け、看護の視点で取り組みたいと考える。